

## T<sub>E</sub>X は軽量マークアップの夢を見るか

鹿野 桂一郎  
k16.shikano@lambdanote.com (@golden\_lucky)

現在、T<sub>E</sub>X を生で使う機会はあまりなく、その上の L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X などが主に利用されている。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X は、T<sub>E</sub>X にとって、一種のマークアップ記法を提供するものと見ることもできるだろう。

一方、昨今では、ドキュメンテーションの構造指示のために各種の Markdown 方言や reStructuredText が広く利用されている。これらは、それ以前から存在する XML や Wiki 記法、あるいは L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X といったマークアップ手法と対比して、軽量マークアップ記法と呼ばれることも多い。

軽量マークアップ記法を採用しているドキュメンテーションツールの多くでは、PDF 出力のための中間形態として T<sub>E</sub>X または L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X が利用されており、そこではマークアップからマークアップへの変換が発生する。その際には、基本的な要求として記法の拡張性や出力結果のカスタマイズ可能性が焦点になるが、そうした焦点に対する根本的な解決策はいまだ見出されているとはいえない。

本発表では、T<sub>E</sub>X が提供する PDF のレンダリング層に対する各種マークアップ周辺の問題について、現状と未来を考える。

### キーワード

- ・ Markdown
- ・ reStructuredText
- ・ Re:VIEW
- ・ XML、xml2tex

